

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0659
施設名	みちてる保育園
施設所在地	中央区2-22-2
法人名	社会福祉法人道輝会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

自然
<テーマの設定理由>
都会でも工夫次第で自然の探究ができるという視点のもと、「身近な自然」を子どもたちの好奇心を育てる入り口として設定した。園庭の限られた環境の中でも、生き物との出会いや植物の観察・栽培・変化の発見を通して、「なぜ?」「もっと知りたい!」という主体的な問いを引き出し、継続的な学びへつなげることを目的とした。
2. 活動スケジュール
4月22日～4月30日メダカ・エビの観察、ビオトープ作り 5月12日～5月28日植物で作る色水 6月2日～ダンゴムシ飼育 7月1日～8月8日野菜の種・形・育っていく様子を探究
3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定
【素材・道具】 園庭用の小さな池・ビオトープスペース メダカ、ママエビ、タニシ、水草などの生き物・植物 虫眼鏡、図鑑（ダンゴムシ観察・調べ活動） 屋外で見つけた赤い色素を持つ花（つつじ）、紫キャベツ、ハイター、レモン水など スライム作り用のホウ砂、洗濯のり 野菜、種（園で栽培した野菜、野菜の断面観察用） 画用紙、絵の具、ペン（断面スケッチ・自由表現用） 【環境設定】 園庭に小さな池を設置し、ビオトープとして整備 観察・栽培・水の管理を子どもと保育者が一緒に行える動線の確保

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

ビオトープを作り、生き物や植物を迎え入れ、日々の変化を継続観察

→園庭に小さな池を作り、メダカ・エビ・タニシ・水草を迎え入れ、水や生き物の変化を毎日観察。雑草抜きや水管理も一緒に実施。

「何がいる？」「どう変わった？」という対話を通して観察の視点を言葉にしていった。

ダンゴムシ探しでは、図鑑を使って特徴・分類・生態を調べる活動

→「どこにいるの？」「何を食べるの？」と観察道具や図鑑を片手に探究。→「虫じゃなくて甲殻類！」「お腹に卵！」などの発見と驚きの共有。

赤（紫）の色素を使ってスライムづくり

→ホウ砂を混ぜて色が変わったことで、他にも色を変えるものがあるのか探究。ハイターやレモン水などを用意して赤（紫）の色素が濃くなったり茶色っぽくなったりすることを確認（混ぜるものをもう少しいろいろ用意すべきだったという保育者の反省あり）

野菜と種の比較・スケッチ・クイズ活動

→園で育てた野菜をきっかけに「この種はなんの野菜？」クイズが開始。→切って断面を観察し答え合わせ、断面スケッチ、色や形の比較、絵の具で自由表現。

野菜と種の探究では、切る・描く・見比べる・答え合わせを通して比較・思考・表現を実践
保育者は問いの橋渡しや観察の支援、素材準備の改善点の振り返りを行った

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

【子どもの姿・声】

池を覗き込んで夢中になる姿「あ！なんか動いた！」「昨日いなかったのに！」

生き物の分類に驚く声「ダンゴムシって虫じゃないの！？」「エビの赤ちゃんいる？」

野菜の断面観察・スケッチに集中する姿「この模様おもしろい」「種ってこんな色なんだ！」

クイズで理由を伝え合う対話「だって丸い種だった」「色が似てたから！」

【関わり】

子ども同士：発見の共有・納得・共感・協働

保育者：問いの言語化支援・調べ活動のサポート・観察の橋渡し・環境管理の協働

都会の限られた環境でも、継続的な観察と対話の仕掛けがあれば探究は深まる



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

子どもは小さな発見を大きな喜びに変える力がある

「知りたい！」を自分の力で確かめようとする姿勢が育っている

生き物や植物への興味は予想以上に広がり、素材準備や環境構成はより柔軟な改善が必要
子どもの自由な発想の豊かさと主体性に、保育者自身も学びと成長を得た。

園庭の小さな自然環境（池・ビオトープ）と、子どもたちに身近な生き物・野菜・種を題材に、「発見→調べる→表現→共有」の流れで探究活動を実践した。子ども自身が観察の視点を言語化し、図鑑で調べ、断面や特徴をスケッチや絵の具で表現する姿へつながった。今後は、子どもの興味の方角性により柔軟に応える素材準備と環境構成をさらに改善しながら、継続的な探究活動を行っていく。